

カンボジアでのチャリティマラソンにみる発展途上国におけるスポーツイベントの有益性

The benefits of holding sporting events in developing countries

: A charity marathon in Cambodia

1K03B130-4 氏名 土屋智美

指導教員 主査 リー・トンプソン先生 副査 原田宗彦先生

【序論】

スポーツが商業化し、スポーツ及び経済の発展に影響を持っていることは事実である。しかし、近年その商業化の行き過ぎによる弊害も生まれている。スポーツをビジネスとして経済合理性の追求に囚われ、スポーツ本来の目的や魅力を見失ってはいないだろうか。スポーツのプラス面を異なった分野に活かすことができるのではないだろうかと考え、私が以前から関心を寄せてきた国際協力分野においてスポーツが貢献できるということを探るべく、私はカンボジアを中心に体育・スポーツ分野で活動しているNPO 法人ハート・オブ・ゴールドでインターンシップを行った。この経験を活かし、ハート・オブ・ゴールドが1996 年から毎年行ってきたアンコールワット国際ハーフマラソンを事例として、スポーツイベントが発展途上国において有益であるということを論じ、スポーツビジネスと国際協力の関係性を述べる。

【第1章】 スポーツによる国際協力

第 1 章ではこれまでのスポーツによる国際協力について触れる。国連や国連各種専門機関、IOC などの活動を取り上げスポーツがどのように開発手段として存在してきたかを述べるとともに、スポーツによる国際協力は「スポーツを開発する」ものと「スポーツを手段として問題解決に取り組む」ものに区別し、ここでは後者の開発手段としてのスポーツに基づいて論じることとする。また、国際機関が開発の手段としてスポーツをどのように捉えているかを例に挙げ、国際協力におけるスポーツの可能性を示唆し、スポーツによる国際協力は世界の諸問題解決及び持続可能な開発を実現可能であることを論じる。

【第2章】 国際協力・国際開発とは

第 2 章では何をもって開発とするかという開発の概念について述べる。これまでの国際開発概念に触れ、本論文において中心となる概念である内発的発展論について述べる。発展途上国を開発の対象としてではなく開発の主体として捉え、人間の基本的ニーズを重視し、その社会の内部からの発展を目指すという「内発的発展論」を前提に国際協力・開発としていくこと、本論文で述べる「スポーツを通じた開発」というのは単系的な近代化論ではなく、内発的発展論に基づくものであると定義づける。

【第3章】 開発手段としてのスポーツイベント

この章では開発手段としてスポーツイベントを用いるために、スポーツイベント自体を把握する。また、スポーツイベント開催による地域社会形成機能に注目し、スポーツイベント開催の持つ役割を述べる。そして、スポーツイベントが開催都市に与える影響を 6 つに分類する。この分類の項目が次章でアンコールワット国際ハーフマラソンという実際の参加型スポーツイベントの発展途上国における有益性を説明する試金石となる。

【第4章】 アンコールワット国際ハーフマラソンの事例研究

スポーツによる国際協力活動をしている NPO 法人ハート・オブ・ゴールドの活動を紹介し、同団体設立のきっかけとなったアンコールワット国際ハーフマラソンというチャリティマラソンを実例として、この大会開催による現地への影響や波及効果を取り上げる。カンボジアの歴史的背景及び現状を踏まえ、第 3 章で挙げたスポーツイベント開催による影響のプラス・マイナス両側面の項目をアンコールワット国際ハーフマラソンと照らし合わせて考察する。そして、このスポーツイベントによる効果を明らかにする。

【第5章】 結論

第 1 章ではこれまでのスポーツによる国際協力の変遷を振り返り、第 2 章では国際協力・開発の定義づけをし、第 3 章では開発のためのスポーツイベントについて述べてきた。これまで述べた事柄から、スポーツが国際協力分野で期待される役割は多様であり、実際に国際機関により国際協力のツールとして十分に活用されていると言える。そして、第 4 章で具体的事例としてアンコールワット国際ハーフマラソンによって実際にカンボジアでスポーツイベントがもたらす効果が明らかになったことから、スポーツイベントが発展途上国において有益であると言える。そして、スポーツイベント経営により発展途上国に複合的レガシーを生み出すことが可能であることから、スポーツビジネスが国際協力のツールとして新たな可能性を持っていることを示唆する。